

16. 海物語

各務原市立緑苑小学校

6年 青木 望 矢野 太郎 久芳 優華

土生 華奈子 横井 映美



敦賀市立粟野南小学校

6年 倉貫 春菜

「いってきまーす」

僕は、勢いよく家を飛び出した。今日は、おじさんが海に連れて行ってくれるからだ。僕の名前は直人。泳ぐことが大好きな六年生。算数も自分では得意だと思っている。ププー。おじさんの車に乗り、さっそく海に出発だ。

「直人、新しいのを思いついたぞ。『ホタテが、穴をほったって』……どうだ？」

おじさんは、最近ギャグにはまっている。

「さあ、泳ぐぞ」

「クラゲには気をつけるんだぞ。なぜだか分からないけど、クラゲがどんどん増えているらしい」

「分かったよ」

さっそく泳ぎだした。僕は海を見回した。あれれ、前に来たときよりも、なんだかゴミが増えているぞ。

チクッ！

クラゲに刺されてしまった。

ザブーン……。

波にまで襲われてしまった。だんだんと意識が遠くなっていく……。

「……すか？ ……大丈夫ですか？ 大丈夫ですか！！」

「……はっ、僕はどうしていたんだ」

「やっと気がつきましたね。僕は、イルカのユラリーです。別にゆれているわけではないんですがね。君の名前は？」

「僕の名前は直人だけど……」

（あれ？ ここは海の中だよ。でも、息ができるし、イルカの言葉がわかる。どうなっているんだ……）

「さっそくだけど、君にお願いがあるんだ。最近、ドルフィン王国が危なくて」

「どうして？ それに、ドルフィン王国って……？」

「まあ、後で説明するから。とにかく僕の背中に乗ってよ」

奥に進むにつれて、魚よりゴミの方が増えていっている。

「あっ、門番だ」

「暗号を言いなさい」

「えーと、なんだっけ」

「えー、わすれたの？ よし、ここは勘で、『ひらけーごま』」

「違います」

「じゃあ、もしかして、『いるかはいるか』」

「正解です。中へお入りください」

（当たっちゃったよ。おじさんのギャグがこんなところで役に立つなんて）

そんなことを思っている間に、王様の所までやって来た。

「ようこそいらっしゃった。この国の王のドルフィン三世じゃ。実は最近、水が汚れてきて、わしらが住む所が減ってきているのじゃよ。よごれを取り除くには、伝説のシャチの魔法が必要なんじゃ。そこで、おぬしにシャチを探してほしいんじゃ」

（このままじゃ、魚が住めなくなっちゃう。これはやるしかない。これから先、どんなことが起こるんだろうか……）★

「ねえ直人。ぼくも手伝うよ」

「うん。ありがとう！」

ユラリーも探してくれることになった。

「でも、こんな広い海の中から探すのは大変だよ」

「大丈夫じゃよ。探す所はかぎられておる」

（よかったー）

ドルフィン三世は地図を直人にわたした。

「これは……」

「それは、ハズミ島と人魚カントリーに行くまでの地図じゃ」

「この二つの場所にシャチがいるの？」

「ああ。たぶんな」

直人はユラリーの背中にのった。

「よし！ シャチを探そう！ まずはハズミ島に行こう」

「OK！」

二人はすごいスピードでハズミ島にむかった。

「あっ見えてきた。ハズミ島。あそこにおりて、ユラリー」

「りょうかい。直人」

あっという間に二人は、ハズミ島にとouchやくした。

「直人。ハズミ島には、生き物が住んでいないんだ」

「う～ん。どこかな。シャチは」

一時間探しても、シャチは見つからなかった。

「ぜんぜん見つからないよ～」

「それじゃあ、次に、人魚カントリーに行こう」

二人は、またすごいスピードで人魚カントリーに向かった。

「ユラリー、人魚カントリーって島なの？」

「ちがうよ。人魚カントリーっていう国なんだ。人魚がたくさん住んでいるよ」

人魚カントリーについたら、人魚がたくさんいた。そして、ドレスを着た人魚がやって来た。

「あなたがたは、どなた様ですか」

「ぼくは、直人。こっちがユラリー」

「わたくしは、人魚カントリーの王女、サファイアです。あなたがたは何をしにきたのですか？」

ユラリーが答えた。

「実は、最近水がよごれてきて、ぼくたちの住むところが減ってきているんです。そのよごれを取り除くためには、伝説のシャチの魔法が必要なんです。それで、ぼくたち、シャチを探しているんですけど……」

すると、サファイア王女が言った。

「シャチなら人魚カントリーにいますよ。一頭ですけど……。『山吹島』という小さな島にいます」

「ありがとう。王女様」

「このまま、まっすぐいけば『山吹島』の旗が見えます。旗を目印に進んでください。では、気をつけて」

「ユラリー、『山吹島』へ行って」

サファイア王女は二人を見送った。

「あ、旗だよ。『山吹島』だ」

『山吹島』は静かだった。奥の方に、暗いトンネルがあった。

「ユラリー、あのトンネルの奥へ入ってみよう」

「いっ、いいけどおー。すごく暗くて怖そう」

トンネルの中は真っ暗で何も見えなかった。

「ぼく、懐中電灯持ってるよ」

パッと、懐中電灯を直人がつけた。辺りが明るくなった。

するとそこに、大きなシャチがいた。

「シャチだ！ シャチだよ、ユラリー。見つけたよ」

ユラリーがシャチに事情を話した。シャチは、OKしてくれた。

それから二人は、シャチを連れて猛スピードでドルフィン王国に戻った。

「王様。シャチを見つけました」

「おお。見つけたか。さっそく海をきれいにしてくれ」

シャチはしっぽを振って光を出した。全体に光が広がった。

「ありがとう。直人ー」

また気が遠くなった。気がついて、目が覚めると、砂浜の上だった。

「あれ？ ユラリーは？」

海全体を見回すと、海の水がきれいになっていた。

「あれは、夢じゃなかったんだー」

「おーい、直人、何してる？ 泳ぐぞー」

おじさんの声がした。

「うん」

水がきれいになって、海の生き物たちは、楽しく暮らせるようになりました。